

文学における「オオカミ形象」

(D.ナムダグの「老いたるオオカミの遠吠え」と姜戎の「神なるオオカミ」)

T.サラン

(モンゴル国立大学総合科学部人文科学系列文学芸術研究学科博士研究生)

いずれの民族の口承文芸と書面文学においても動物の諸形象が存在し、それらは慣習として定着した、独立した、特殊な典型表現となっている。言い換えれば、口承文芸と書面文学における動物の諸形象の大部分が慣習化した典型を持ち、それにしたがって定型化された民話(үлгэр)や物語(өгүүлэмж)が誕生した。たとえば、

- キツネは狡猾、欺瞞、追従を表わす代表的な人物形象であり、
- ヒツジは従順、正直、軟弱を表わす代表的な人物形象であり、
- ウサギは賢明、聡明、敏捷を表わす代表的な人物形象であり、
- クマは乱雑、鈍重、粗野を表わす代表的な人物形象である。

これらと同じく、私たちの身近にある口承文芸や書面文学のひとつの動物形象がオオカミの形象である。モンゴルの口承文芸や書面文学には「オオカミ形象」がきわめて豊富にある。しかもその大部分が傲慢で貪欲な人物の代表的な形象である。私たちは今回、D.ナムダグの中編小説「老いたるオオカミの遠吠え」と姜戎(ジャンロン)の長編小説「神なるオオカミ」におけるオオカミ形象を比較し、口承文芸に見られるオオカミの代表的な形象と同じなのかどうか、あるいは異なるのかどうかということについて明らかにする観点から、いくつかの語り(өгүүлэмж)に依拠しながら取り上げて見た。

- 姜戎は長編小説「神なるオオカミ」という作品で、草原の牧民とオオカミの生活を通して中国の自然環境がどのように破壊されているのか、作品の主人公の陳陣(チェンジェン)の深思熟考を通して、人類が自然世界と調和した関係を保ち、自然と社会の均衡を守らなければならないということを反映し描いている。
- それに対して、D.ナムダグは中編小説「老いたるオオカミの遠吠え」という作品で、「情けは人の為ならず(хариугай бол баруугай)」と言われるように、人類が自然と社会の法則にしたがわなければ自然からその報いを受けることになるのを、オオカミたちの血みどろの死闘を通して表現し、人びとが自然との調和をいかにして確保してゆくのかということを率先して描いている。
- 姜戎の長編小説「神なるオオカミ」におけるオオカミは、勇敢で力強く、理知的で忍耐強いが、自由のためには自らの命もかえりみずに闘うこともきわめて重要であることを、自然の連鎖関係に貴重な貢献をするという観点から評価し描いている。
- それに対して、D.ナムダグの中編小説「老いたるオオカミの遠吠え」では、人と自然の調和、人は自然と調和した関係を保持してゆかなければならないということを強調し描いている。このことは、この二つの小説が普遍的な共通性を持った作品であることを表している。

これらすべてを明らかにする観点から、

1. 二つの作品におけるオオカミが餌や獲物を捕らえている語り、
2. 二つの作品に描出されているオオカミに関する考えと語り、
3. 二つの作品におけるオオカミの逃走してゆく姿の語り、これらを観察し研究した。